

平成二十九年年度

日本近世文学会春季大会

・大会プログラム ・研究発表要旨

期日 六月十日(土)・十一日(日)・十二日(月)

会場 東京女子大学 二四号館

〒167-8585 東京都杉並区善福寺二一六一

- 一、出欠の葉書を五月十二日(金)必着でお出しください。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(学習院大学文学部)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費七千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一三〇一四一五一四六二八、口座名「日本近世文学会春季東京女子大学大会」)で、五月十二日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、大会二日目(六月十一日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙でご送金ください。
- 一、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。
- 一、三日目(六月十二日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季東京女子大学大会事務局

東京女子大学日本文学専攻 光延真哉研究室

〒167-8585 東京都杉並区善福寺二一六一

電話 〇三―五三八二―六三〇七(直通)

メールアドレス s-mitsunobu@ab.twcua.ac.jp

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、平成二十九年年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十九年四月二十日

【会場】東京女子大学 【行事】

第一日 六月十日（土）

委員会（一・二・二〇～一・三・四〇）

委員会会場 二四号館三階二四三〇一

大会受付（一・三・〇〇）

開会時間（一・四・〇〇）

研究発表会（一・四・〇〇～一・五・五〇）

研究発表会場 二四号館二階二四二〇二

1 『万の文反古』巻二の一「縁付まへの娘自慢」考―「今程世間に見せかけのはやる事はなし」をめぐる―

2 『浄土要文抄』『あみだはだか物語』『あみだかんきん抄』の諸版

3 関ヶ原説話の生成―植木悦『慶長軍記』再考―

日本近世文学会賞授賞式・総会（一・六・〇〇～一・七・三〇）

懇親会（一・八・〇〇～一・〇・〇〇）

懇親会場 吉祥寺東急REEホテル 三階宴会場「むさしの」

〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町一―六―三

電話 〇四二―四七―〇一〇九

日本近世文学会春季大会会場校代表 光 延 真 哉
日本近世文学会事務局代表 鈴木 健 一

【事務局連絡先】

〒171-8588 東京都豊島区目白一―五―一

学習院大学文学部日本語日本文学科

鈴木健一研究室

電話 〇三―五九〇四―九二九一

FAX 〇三―五九九二―九三一七

e-mail info@kinseibungakukai.com

大阪大学（院）岡部 祐 佳

中京大学（非）飯野 朋 美

防衛大学校 井上 泰 至

第二日 六月十一日(日)

大会受付(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇～一二・一〇)

研究発表会会場 二四号館二階二四二〇二

4 佐倉惣五郎物実録の系譜―『佐倉花実物語』の位置づけをめぐる―

早稲田大学(院) 荻原大地

5 『清渚集』「神宮先輩并近來国学人歌集」に関する一考察―長歌部に見る本居大平の影響―

梅光学院大学 倉本昭

6 小番付集『浪花みやげ』考―幕末の娯楽的読み物の流通とその性格―

ケンブリッジ大学 ラウラ・モレッティ

昼 休 み(一二・一〇～一三・三〇)

編集委員会会場 三号館一階三二二五

研究発表会 午後の部(一三・三〇～一五・一〇)

研究発表会会場 二四号館二階二四二〇二

7 『児雷也豪傑譚』作者考―一筆庵主人から柳下亭種員への嗣編の問題を中心に―

京都大学(院) 大関綾

8 合巻の表現規制と『茶釜前杓子物語』

日本大学 佐藤至子

9 『雅仏小夜嵐』も上田秋成作ならん

明治大学名誉教授 徳田武

閉 会(一五・一〇)

第三日 六月十二日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

図書展示 第三回 創立一〇〇周年記念展示 古典に親しむ―東京女子大学ゆかりの和書より―

日時 三月十五日(水)～六月十二日(月)

学会開催期間中、六月十日(土)は午前十時～午後六時、六月十一日(日)は午前九時～午後四時、六月十二日(月)は午前十時～午後四時に自由にご観覧いただけます。学会開催期間外は原則水曜日のみ午前十時～午後四時の開室で、事前予約が必要です。

詳細は東京女子大学ホームページをご覧ください。

場所 本館二階「新渡戸記念室」(学会開催期間中の六月十日(土)・十二日(月)に、図書館一階で故秋山虔氏所蔵の古典籍も展示しています。合わせてご覧ください。なお、六月十一日(日)は図書館閉館のため見られません。ご注意ください。)

※会場にて『近世文藝』九三号・九四号を無料配布いたします。

『万の文反古』巻二の「縁付まへの娘自慢」考

——「今程世間に見せかけのはやる事はなし」をめぐる——

大阪大学(院) 岡 部 祐 佳

西鶴の第四遺稿集『万の文反古』は、独立書簡体短編集という特徴的な形式を持つ作品である。

巻二の「縁付まへの娘自慢」は、姪・おはつの結婚の知らせと嫁入り道具購入依頼の手紙を受け取った兵庫屋平九良が、弟であるおはつの父・平右衛門に宛てた返信書簡である。平九良は、嫁入り道具の贅沢さとおはつの育て方に苦言を呈し、先方が敷銀を望まないのには企みがあるとの推測をも述べる。

本章段は従来、現実的で実直な兄・平九良が、町人の資質に欠ける弟・平右衛門に対し、書簡を通して忠告を与え、そこから当時の町人の経済生活のあり方が浮かび上がってくる話とされてきた。平九良の主張を認め、両者の関係を「商人としての優劣」という構図で捉えてきたのである。

確かに、一見すると平九良の主張は的確なもののように思われる。しかしその忠告や推測はあくまで教訓や一般論に基づくものにすぎない。また、当時の商人層の婚姻を巡る事情に鑑みれば、従来短慮とされてきた平右衛門の行動には、商人としての戦略性を認めることができる。

本発表では、平九良を「教訓や一般論を重んじる保守的商人」、平右衛門を「戦略的に利益を求める向上心の強い商人」として捉え直し、そのような対照的商人像が、独立書簡体という特殊な形式で描かれることで、当時の婚姻をめぐる商人たちの有り様が、臨場感をもって浮かび上がってくることを指摘する。

『浄土要文抄』『あみだはだか物語』『あみだかんきん抄』の諸版

中央大学(非) 飯 野 朋 美

『浄土要文抄』『あみだはだか物語』『あみだかんきん抄』は、本文が重なり合う諸作である。朝倉治彦氏は、『仮名草子集成』第一巻解題に、『あみだかんきん抄』が『あみだはだか物語』の下巻を独立させたものであるとし、明暦二年(一六五六)版、刊年無記載の松会版、下巻のみの寛文四年(一六六四)山本九左衛門版と寛文十年本問屋版を見出したことを記している。次いで市古夏生氏は、明暦二年の刊記を持つ『あみだはだか物語』下巻が、同年刊『浄土要文抄』の巻頭に代えて目録と本文冒頭を新刻し、以下をそのまま利用したものであるとされた。

これら三書の版種は、かなり多い。市古氏蔵明暦二年刊『浄土要文抄』は未見だが、それ以外に現時点で七版十種を確認することができた。本発表では、以下のことを述べたい。

(一)『あみだはだか物語』明暦二年刊記本は柱の修訂が行われ、江戸時代中期に求版され、長らく享受され続けた。(二)『あみだはだか物語(かんきん抄)』松会版の刊行は寛文六年一月である。前述の山本版、本問屋版のほか、刊年未詳の亀屋版『浄土要文抄』もあり、江戸で異版が多数出された。(三)寛文六年五月には八文字屋八左衛門版『あみだかんきん抄』が出された。寛文期の八文字屋版で浄瑠璃本以外のものは珍しい。この版の本文は明暦二年刊記本に拠っていると思われるが、同版には見られない「かんきん抄」が尾題となっており、寛文六年一月松会版を意識して刊行されたものと推定できる。

関ヶ原説話の生成

―植木悦『慶長軍記』再考―

防衛大学校 井 上 泰 至

関ヶ原の戦いの実像をめぐることは、これまでの見方に根本的な疑問を投げかける議論が、近年歴史学でなされている。例えば、白峰旬は、所謂「小山評定」や、小早川秀秋が家康の命による鉄砲発射で、裏切りを決断したという「間鉄砲」など、ポイントとなる事件を、後の軍記による捏造と断じ、後者については、慶長五年九月十五日早朝の小早川の裏切りによって、西軍は一気に瓦解したという新説を提出した（『関ヶ原合戦の真実』二〇一四年）。では、通説の関ヶ原像はどの時点で成立したのかという興味に立てば、改めて『慶長軍記』（寛文三年序）の存在が浮上してくる。既に発表者は、本書が、関ヶ原モノ軍記の先駆けとして、よく知られる宮川忍斎『関ヶ原軍記大成』より早いものであることを論じていた（『サムライの書斎』二〇〇七年）が、今回新たに以下の点につき報告する。

即ち、著者の甲州流軍学者植木悦に関する新資料（『兵家系図』、寛文三年本と八年本に大別できる諸本の整理、先行軍記等にはないオリジナルと思しき記事の特徴、特に、植木が仕官した藤堂支藩久居初代高通（任口）に関連して藤堂家関係記事を増補した意味等である。さらに、大名家譜・軍記・実録・絵図・屏風等へと多様な展開を見せる本書の受容の問題についても、後続の『関ヶ原合戦誌記』『黒田家譜』『関ヶ原軍記大成』等との比較、および『慶長軍記』に載る四つの絵図と、合戦絵図や屏風との関係などから展望する。

佐倉惣五郎物実録の系譜

―『佐倉花実物語』の位置づけをめぐる―

早稲田大学（院） 荻 原 大 地

近世実録はいまだに手つかずの作品が多い。中でも、佐倉惣五郎物実録は農民・佐倉惣五郎を主人公に採り、為政者に対する抵抗を描いた実録として注目される。これまで、この佐倉惣五郎物実録は諸本の体系的な整理が為されておらず、その全体像の把握も難しい状態であった。しかし、菊池庸介氏の「主要実録書名一覧稿」（『近世実録の研究』汲古書院、二〇〇八年二月）によって、佐倉惣五郎物実録の書名がリスト化されたことで、佐倉惣五郎物実録の研究を進めるきっかけが得られた。

そこで発表者は管見に入る限りで、佐倉惣五郎物実録の諸本の調査と整理を行い、歴史学の分野での先行研究も踏まえつつ、佐倉惣五郎物実録の全体像の把握と他文芸への展開の様相を説明することに努めた。

本発表では、その結果として、佐倉惣五郎物実録が地藏堂系と騒動記系に大別できること、佐倉惣五郎物実録においては騒動記系が主流を占めたこと、騒動記系に属する『佐倉花実物語』が松亭金水の著した読本『忠勇阿佐倉日記』の種本となった可能性が高いこと、さらに『佐倉花実物語』が『今古実録 佐倉義民傳』の底本となっていることの四点を指摘する。

本発表によって、佐倉惣五郎物実録の全体図と発展の様子を把握することが可能となり、佐倉惣五郎物実録の実録種読本への展開や明治期の『今古実録』シリーズへの展開を考える上で、『佐倉花実物語』が重要な位置を占めることを明らかにできると考えている。

『清渚集』『神宮先輩并近來国学人歌集』に関する一考察

—長歌部に見る本居大平の影響—

梅光学院大学 倉 本 昭

内宮欄宜・荒木田経雅が編んだ四十九巻から成る和文和歌集『清渚集』（神宮文庫蔵）は、巻四十四から始まる「神宮先輩并近來国学人歌集」をもつて完結している。本発表では、その歌集に収められた長歌群に注目したい。

経雅の「神宮先輩并近來国学人歌集」は、近世文学史において、ほとんど言及されることがない。だが、経雅の親友・本居大平が編んだ和学者の古風和歌アンソロジー『八十浦之玉』は岩波書店刊『日本古典文学大辞典』に項目が立てられていて、『新編国歌大観』に活字化される。この『八十浦之玉』の原本と呼ばれてきた大平手稿や版本に収まる長歌群を見ると、『清渚集』にも収められた作品が散見する。随筆『経雅卿雑記』によって証される経雅と大平との親密な関係からすれば、経雅は「神宮先輩并近來国学人歌集」編纂に当たり、大平から提供された資料の恩恵に預かったと思われる。のみならず、「近來国学人歌集」を編む発想自体、大平との交友があって生まれえたものだと考えることができる。実際、この歌集に収録される長歌には大平の作品が目立つ。そこには、友の大平こそ、神宮を中心とする文芸圏の「いま」と「これから」に重要な役割を果たす人物だ、という経雅の思いも読み取れる。

『八十浦之玉』と並行するように経雅が編んだ歌集が、大平編の古風和歌アンソロジーと趣を異にするのは、神宮文芸圏を顕彰したい思いの存することに由来すると考える。

小番付集『浪花みやげ』考

—幕末の娯楽的読み物の流通とその性格—

ケンブリッジ大学 ラウラ・モレッティ

いわゆる「小番付」類を集めた『浪花みやげ』は、幕末から明治期まで長期にわたり人気を博した。本発表では、『浪花みやげ』の諸版を整理しその流通の様相を明らかにするとともに、大衆向け読み物としての性格について詳細に検討する。

まず、初版と思われる塩屋喜兵衛版を紹介する。初編五冊・二編五冊の中に河内屋得兵衛などからの求版の一枚摺り（多治比郁夫氏が言う初刷本に相当するものか）が含まれていることを確認する。次に、河内屋平七への板木の移動・小番付の入れ替え・追加等を検討する。加えて、『浪花みやげ』と綿屋喜兵衛版の『楽しみさうし』（五冊）および嘉永五年刊の『吾妻土産』（五編）との関係を明らかにする。最後に明治十三年刊『浪華みやげ』『開化／浪華みやげ』などの存在にも触れる。

内容は、小野恭靖氏が論じた「言葉遊び」の他に、①「情報伝達」②「便利な知恵の提供」③「機智的遊び」④「流行作品の一枚摺化」に分類できることを指摘する。②の中から、京の大谷仁兵衛版の『やしなひ草』二編（弘化二年以降刷）が使用されている例を挙げ、また④の中から、文化三年刊『小野ばくちら謠字尽』（式亭三馬作）と文化十四年刊『一休蟻川／狂歌問答』が書き直されている例を紹介する。

以上のように『浪花みやげ』の検討を通して幕末における情報の娯楽化の様相が把握でき、当時の大衆向け娯楽的読み物の範疇がいかに広がったかを知ることができる。

『見雷也豪傑譚』作者考

― 一筆庵主人から柳下亭種員への嗣編の問題を中心に ―

京都大学（院） 大 関 綾

合巻『見雷也豪傑譚』（天保十一―慶応四年）は四人の作者によつて書き嗣がれた。序文の署名から七―十一編の作者とされる一筆庵主人は九編刊行後の嘉永元年夏に没し、没後に十・十一編刊行、続く十二編から柳下亭種員が執筆したとされている。

二十編の序文において、種員は前作者二人の執筆内容に齟齬が生じていることを指摘しており、その該当箇所はすべて九編までに確認される。このことを踏まえると、十・十一編の序文には、一筆庵生前脱稿との旨が記されるものの、両編の作者については、検討の余地があるように思われる。

さて、天理大学附属天理図書館に一筆庵の自筆とされる『見雷也豪傑譚』十編、『其紫鄙面影』四編上、『青陽石序礎』二編上・三編上の稿本が所蔵される。これらの作品の編はいずれも一筆庵の没後、同人の作として刊行されたもので、その序文には生前の脱稿とあり、署名も記される。しかしながら、稿本三作品における本文の筆跡は種員のそれに酷似しており、一筆庵没後にこれら三作品を種員が書き嗣いでいることも勘案すると、従来一筆庵作とされる没後刊行の編は種員の代作である蓋然性が高い。以上の論を強固にするため、一筆庵晩年の作品についても調査し、一筆庵と種員との関わりについて吟味した上で、『見雷也豪傑譚』に関して種員が十二編よりも前、具体的には十編から作品に携わっていたことを指摘する。さらに、この嗣編の問題を端緒に、作品論への展望を述べる。

合巻の表現規制と『茶釜前杓子物語』

日本大学 佐 藤 至 子

『茶釜前杓子物語』（竹塚東子作、文化八年刊）は九尾狐譚に取材した黄表紙風の合巻である。作中には、近年流行の復仇の草紙や絵入読本に幽霊・蛇・悪人などがしばしば登場することを不快に思つた平知盛の霊が、紅鳶式部（実は九尾狐）を通じて国守にそれを訴え、同意した国守が紅鳶式部に命じてそれらを捕らえさせ、打ち首にする場面がある。

幽霊が読本・合巻に頻出し人々に飽きられているという認識は、作者の内幕を描いた『腹之内戯作種本』（式亭三馬作、文化八年刊）にも見られる。だが『茶釜前杓子物語』では単に素材としての流行り廃りが描かれるのではなく、権力者がそれらの排除に関わる筋立てになっている。当時、絵入読本改掛肝煎名主は草紙読本類における「剛悪殺伐不祥之絵組」を問題視し（文化四年）、地本問屋仲間は「男女共凶悪の事」「同奇病を煩ひ、身中より火採燃出、右に付怪異の事」「異鳥異獣の図」等を含む合巻を出版しない旨を決め、作者に通知していた（文化五年「合巻作風心得之事」）。『茶釜前杓子物語』ではこうした表現規制が戯画化されていると解釈できるのではない。

結末には東子の友の言として「幽霊と蛇、月代の長い悪人も見物の受けが良きまゝに出るなるべし（略）見る人があるから作る、作るから描く、なんぞ憎まん」とある。東子にとって戯作執筆は趣味的なものだったと思われ（永井啓夫「竹塚東子の環境」）、ゆえに規制をちやかす視点を持ち得たのかもしれない。

『雅仏小夜嵐』も上田秋成作ならん

明治大学名誉教授 徳 田 武

私は『江戸風雅』第十三号に、「洒落本『列仙伝』は上田秋成作なり」を発表したが、秋成作と考えられる作品がもう一つある。それは『雅仏小夜嵐』（明和四年以降、明和刊）であり、夙に中村幸彦が「『列仙伝』のあの世版とも称すべき『雅仏小夜嵐』中本一冊」（宝暦明和の大阪騒壇）と、その性格を喝破していたものである。

『列仙伝』のあの世版とは、『列仙伝』に登場する人物と同一人物が、冥土でどのように過ごしているかを描いた小説、という程の意味である。このように『列仙伝』と近縁にある『雅仏小夜嵐』であるが、特に注目させられるのは、宝暦十三年刊行の『列仙伝』に再三名を出しており、『諸道聴耳世間狙』（明和三年刊）四の二で、主人公に懐かしく取り上げられていた瓜生が、冥土巡りの案内役として、またもや大きく登場している点である。瓜生をかくも重く扱っているのは、管見では『列仙伝』『世間狙』『雅仏小夜嵐』だけである。そこで、この共通の傾向を持つ三作は、偏執的な秋成の作、換言すれば、『雅仏小夜嵐』も秋成作ではないか、という着想が生まれる。

もう一つ、『雅仏小夜嵐』には、明和四年十二月に起った源太騒動を踏まえている部分があり（『浪華粹人伝』解題）、この事は秋成が後年にこの事件を扱った『ますらを物語』を著わしている事を連想させる。つまりこれも、秋成作の一証になり得よう。

MEMO

MEMO

MEMO



JR「西荻窪」駅 (JR中央・総武線、東京メトロ東西線乗入)

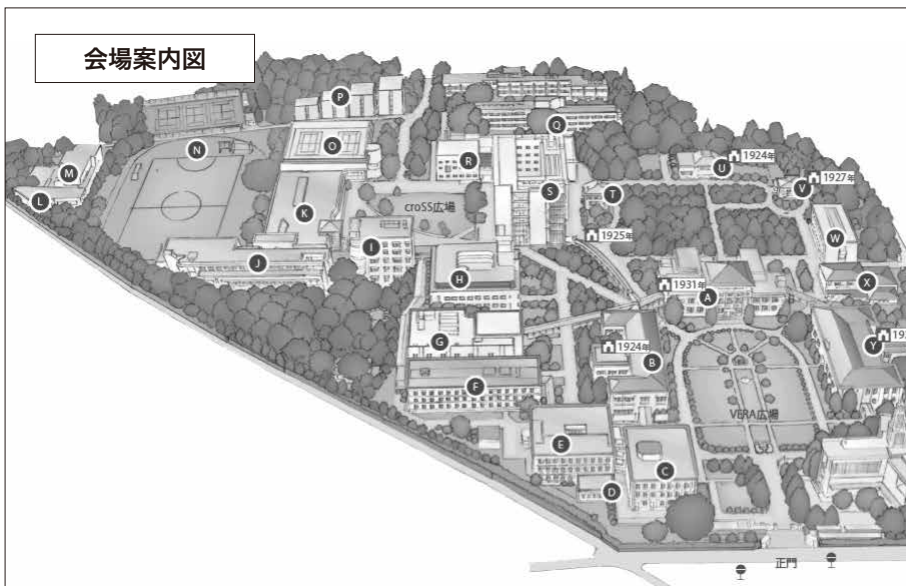
- ・北口より徒歩12分
- ・北口(1番のりば)より関東バス・西10・吉祥寺駅(北口)行バスで「東京女子大前」

JR/京王「吉祥寺」駅 (JR中央・総武線、東京メトロ東西線乗入、京王井の頭線)

- ・北口(3番のりば)より関東バス・西10・西荻窪駅行バスで「東京女子大前」

西武「上石神井」駅 (西武新宿線)

- ・南口より関東バス・西02・西荻窪駅行バスで「地蔵坂上」下車 徒歩5分



G: 24号館 (1F 書籍販売 2F 大会会場/休憩室 3F 委員会会場)

A: 本館 (2F新渡戸記念室・創立100周年記念展示「古典に親しむ—東京女子大学ゆかりの和書より—」)

K: 図書館 (1F入口・故秋山虔氏所蔵古典籍展) **10日(10:00~18:00)・12日(8:45~21:00)のみ。**